

# 高瀬川だより

NPO法人京都高瀬川繁栄会報  
編集人 田村佐起三

〒六〇四一八〇〇一  
京都市中京区木屋町通三条上ル  
電話 (〇七五) 二二二二・一八八

## 『揺れる情(こころ)』通信⑦

稲荷山武田病院院長 土屋宣之／元京都医療センター外科部長  
本居宣長さんは、物の心をわきまえ知ることが、即ち「もののあはれ」を知ることなり、と言っています。そしてこの意味は世間のことをよく知り、ことに当たりたる人は情(こころ)が練れてよし、とも言っています。

宣長さんはまた、家内(いえうち)の世話をする事(家事、主婦の仕事)についてその主婦は万事の心映えをわきまえ知っていると云える。世帯向きの事もずいぶん「こころのあはれ」であるとも言っています。たとえ主婦が花紅葉の折節の情(こころ)や風流を解していなくても世帯向きさえ良ければ「もののあはれ」を体現しているとも言っています。

宣長さんは「もののあはれ」を単なる一種の情趣と受け取る通念から逃れようとして、心を砕いていたのです。

## 京都国立近代美術館

1月6日～3月10日

## 『開館六〇周年記念 小林正和とその時代』

小林正和(1944～2004)は京都市に生まれ、京都市立美大で漆芸を専攻するものの、より自由な色彩表現を求めて川島織物デザイン部に就職し、そこで「糸」と出会いました。一本の「糸」に内在する表現の可能性を追求した彼の作品は伝統的なテキスタイルの枠組みを越えて「ファイバーアート」と呼ばれ、国内外で高い評価を得ることになります。

本展ではこの分野の重要な先駆者としての小林の活動を回顧するとともに、彼と伴走した作家たちの作品を併せて紹介することで、改めて「ファイバーアート」の過去、現在そして未来について考えます。

2024年に生誕80年・没後20年をむかえる小林正和の初めての回顧展として開催される本展では、小林の代表作や関連資料約80点に、彼と歩みをとともにした作家たちの作品を加えた約100点を紹介します。

## 『言葉の移ろい』

常楽臺住職 今小路覚真

犯罪の犯行現場の映像を、テレビニュースの画面で目にします。そしてその時の説明に「防犯カメラ」と必ず示されます。

犯罪が行なわれている、その現場でありながら「防犯」、なんとも不思議な言葉遣いですが、たしかこうしたカメラが設置しはじめたころは「監視カメラ」と示されていました。いつごろか分かりますが、街中に溢れているカメラに「防犯」と示されるようになりました。

わたしが卒業した小学校の跡地に、外国資本のホテルが建ちました。そしてその外回りの植え込み場所がゴミ捨てを禁ずる札が掲げられ、禁ずる言葉と共に「監視カメラ」の文字がはつきり示されてあります。

ホテルが建つてまだ日は浅いのですが、いまだにその植え込みにゴミらしきものを見たことがあります。その「防犯カメラ」が実際に防犯に役立った実例は知りませんが、不自然な言葉の移ろいとししか見えません。

## 『イタリア料理の発展』

イタシヨク 福村直

イタリアの料理文化は古代ローマ時代からの歴史がありますが、当時のパスタはまだ小麦を練る原始的なものが始まったばかり。トマトがまだアメリカから渡っておらず、現在の私たちの知るイタリア料理とはかけ離れていたようです。今のイタリア料理の原型は中世頃から始まったと考えても良いかも知れません。

当時フレンチのメデイチ家からフランス王家に嫁ぐことによりフォークナイフ文化を伝え、決してフランスに劣るものではありませんでした。しかしイタリアは多くの国に分裂しており各々の地域で発展。そして決して裕福ではなく、貧しい農民が硬くなったパンをいかに美味しく食べられるようにするか。河原に生えている野草をいかにして美味しく食べるか。そうした工夫が重ねられたことにより、シンプルながらも素材を美しく活かす庶民の知恵が料理を発展させました。

## 季節の家庭料理

田村真紀

『一月 サルティンボッカ・ローマの家庭料理』  
サルティンボッカは「口の中に飛び込む」という意味で、簡単に作れてアレンジも自在です。生ハムを調味料に見立てるので塩の量は控えます。  
〈作り方・四人分〉豚ロース薄切り肉三百グラム・生ハム百グラム・なす一個・バジル適量・バター二十グラム・オリーブオイル大匙二・白ワイン百ml・薄力粉適量・塩、胡椒少々

ナスは斜め薄切りにして軽く塩を振り、浮き出た水分を拭き取る。豚肉に胡椒少々振り、生ハム、ナス、バジルを重ね楊枝で留め全体に軽く薄力粉を振る。フライパンにバターとオイルを中火で熱し豚肉の面を下にして一、二分焼き、白ワインを加え強火にしアルコールを飛ばす。裏返して軽く焼き取り出す。残った汁を煮詰めてソースにする。

## 『大原流声明雑話⑬』

實光院住職 天納玄雄

年が明けると来迎院と勝林院では大原寺一山の僧侶たちによる修正会が修される。年の始めに悪業を悔い改めることで心身を清め、重ねて国家の安泰や人々の安寧を祈る法要である。

この大原の修正会は、声明の根本道場らしく次第の全体が声明曲で構成されている。さらに特徴的なのは、法要の序盤に導師を勤めるのが下座の僧侶であるということだ。古い次第には仏名をとえながら何度も礼拝をするように記されているから、体力のある若手に役を任せられたのかもしれない。

また法要の途中に、町内の若衆「宮座」による三十三度の作法が割つて入るのも独特だ。「ホツチキホツチキ」と微かに唱えて手のササヲを叩きながら堂内を回る、古い魔除けの作法といわれている。